

志村喬が口ずさみ、森繁久彌が森繁節を回し、小林旭が情感で酔わせた『ゴンドラの唄』——松井須磨子が劇中歌とした名曲は、この百年、100人を超える歌い手が歌い継ぐ

文 山川智

その歌が初めて人の耳朶を打ったのは大正4年 藝術座公演ツルゲーネフ作『その前夜』だった 劇中歌として須磨子が披露したのである 須磨子が演じるのは

モスクワ貴族の娘エレーナ が……ああ、なんと辛く悲しいことか

身も心も捧げた夫インサーロフが

イタリヤで客死したとの報が届く

彼はトルコの圧政に苦しむ

ブルガリア解放運動の闘士だった

エレーナは夫の逝った地

ヴェネツィアでゴンドラに揺られながら唄う

「いのち短し 恋せよ乙女

あかき唇 あせぬ間に

エレーナは強い女だった

夫の意志を継いで解放運動に邁進していく

だが……その歌を唄った須磨子は恋に死す

藝術座を主宰する須磨子の不倫の恋人

島村抱月がスペイン風で幽明境を異にした

2か月後の大正8年1月5日縊死

恋に殉じた33歳であった



昭和歌謡 誕生物語

【第29曲目】

— ゴンドラの唄 —

松井須磨子

男は30年間無欠勤という模範的な役人。ところが、ある日、胃ガンで余命を宣告されてしまう。妻とは死別し息子との関係は冷えている。絶望と孤独の中、町を彷徨い飲み慣れない酒を煽る男。

ああ、俺の人生はいったい何だったのだろうか……。生きる意味を考えはじめた男は、人生の最後に少しでも市民の役立ちたい、とかねてから要望されていた児童公園の完成に尽力する。

そして小雪の舞う夜、完成したばかりの公園のブランコに揺られながら男が楽しげにうたう歌——、それが『ゴンドラの唄』だった。昭和27年に公開された映画『生きる』（黒澤明監督）の名シーンである。

『ゴンドラの唄』は大正4年（1915）、藝術座公演『その前夜』の劇中歌として松井須磨子によって歌われ、その後レコード化されて大ヒットする。

作詞したのは明星派の歌人で石川啄木らとともに文芸誌「スバル」の創刊に当たった吉井勇。彼は伯爵家の次男に生まれ、長男が早世したため嗣子になるが、放蕩と情痴の日々を過ごし爵位を返上したという男だ。そんな吉井がアンデルセンの長編小説『即興詩人』（訳・森鷗外）の中にあるヴェネツィアへ行く船の水夫が歌う舟歌をヒントに詩を書いたのがこの詞であり、その詞に曲を載せたのが、『シャボン玉』や

「背くらべ」といった童謡・唱歌の作曲家として知られる中山晋平だった。

中山は最愛の母を亡くした後、悲しみに暮れる帰りの汽車の車中で、吉井の詞に語りかけられ、汽車の揺れとともに、旋律が湧いてきたそう。

とはいえ、8分の6拍子というワルツ調のメロディーは、大正時代の日本人には難解だったのではないかと。

しかし、明治から大正へと時代が移りゆく中、カフェも増え、人々は西洋的な文化に酔っていた。そんな風潮に合致したのか、当時としては異色だった『ゴンドラの唄』は浅草オペラでも頻繁に歌われて人気を博したというから、世の中は面白い。

新しい時代を象徴しつつ、日本古来の心地良さも感じさせる絶妙な詩と新しいメロディー。それが大正ロマンを謳歌する人々の心を確実に掴んでいたのである。

なお、この歌が生まれて昨年であらうと百年。

黒澤明監督の映画『生きる』によって心奥を涙させた『ゴンドラの唄』は、今も不朽の名曲として歌い継がれている。

山川智●1962年東京生まれ。テレビ制作会社週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 JYJを行く』（共にイーストプレス）『ヒュランダキエメント 幸せのきずな』（リーブル出版）など。また出版プロデューサー作品として『生きる 義家弘介』（スターツ出版）、『デキる社員』（狂食ギヤル）共にイーストプレスなど多数。